

[論文]

趙根在が写した「その人」をよむ

—沢田二郎の肖像写真をめぐって—

西浦 直子（国立ハンセン病資料館）

はじめに

国立ハンセン病資料館（以下、当館と記載）では、沖縄を除く全国の療養所で1961年から1981年まで撮影を重ねた趙根在（チョ・グンジェ）の関連資料を所蔵している⁽¹⁾。そのうち写真は少なくとも2万5千点、うちハンセン病療養所で撮影されたものは2万点を超える⁽²⁾。本稿はこれらの写真群から、国立療養所栗生楽泉園（群馬県吾妻郡草津町）⁽³⁾入所者の沢田二郎⁽⁴⁾を1966年に撮影した写真を取り上げ、二郎の創作や自伝、証言などを用いつつ、写された「その人」の物語のよみときを行う。それによって第一に、写真と被写体にまつわる情報の豊富化をめざし、第二に、「写された人」（沢田二郎）と「写す人」（趙根在）にとっての、当該写真の意味をさぐる。

1. 趙根在の写真の特徴と評価

(1) 趙根在とその写真群について

まず趙根在の来歴とその写真の概要を振り返っておく⁽⁵⁾。

趙は1933年に愛知県の炭坑労働者の家庭に生ま

れ、15歳で炭鉱夫となった。炭鉱で、地底からの強い脱出願望を抱くと同時に、身体に対する鋭敏な感覚を獲得していった⁽⁶⁾。1958年、朝鮮中央芸術団⁽⁷⁾の照明係として訪れた菊池恵楓園（熊本県菊池郡合志村、現在の熊本県合志市）において、朝鮮人患者が、出入国管理令とらい予防法の二重の支配を受けて隔離されていると知った。

その後炭鉱を抜け出し、1961年に朝鮮人の入所者を訪ねて多磨全生園（東京都北多摩郡東村山町、現在の東京都東村山市）に行き、在日外国人ハンセン氏病患者同盟（互助会）から金奉玉（金子保志）を紹介された。この出会いをきっかけに趙の写真撮影が始まる⁽⁸⁾。金はのちに、趙に草津行を促し、二郎と趙が会おうきっかけを作った。

1965年5月、趙は栗生楽泉園で、詩人の笹雄二の居室に滞在しながら⁽⁹⁾、同園で初めての撮影を行った。二郎と知り合ったのは、この時か、1961年に初めて同園を訪問した際のどちらかであろう。1966年5月、12月、1967年1月にも同園を訪れ、1967年4月に同園看護師の齋藤君子と結婚した後も毎年のように訪問していた。

(1) 趙根在の来歴と療養所での経験については、1985年から1986年にかけて雑誌『解放教育』に連載された趙根在「ハンセン病の同胞たち」を参照。以下掲載順に、「1 キブシヤマのころ」（第188号・1985年1月）、「2 岐阜のアタン山へ」（第189号・1985年2月）、「3 舞台の袖から」（第190号・1985年3月）、「4 地底での選択」（第192号・1985年4月）、「5 全生園を訪れて」（第194号・1985年6月）、「6 再び全生園へ」（第196号・1985年8月）、「7 撮る」（第199号・1985年10月）、「8 闇の中のこだま」（第201号・1985年12月）、「9 在日朝鮮人として」（第202号・1986年1月）、「最終回 闘いつづけて」（第204号・1986年3月）。以上はすべて岡村幸宣・小原佐和子編『趙根在 地底の闇、地上の光—炭鉱、朝鮮人、ハンセン病—』（原爆の図丸木美術館、2023年2月）に再録されている。以下、引用は同展カタログでの掲載ページを記す。

(2) 当館では他に、4,333点にのぼる蔵書や、スクラップブック、使用したカメラ等の関連資料を所蔵している。

(3) 以下、各療養所名の記載は「国立療養所」を略す。

(4) 沢田は1923年に群馬県で生まれ、1935年にハンセン病を発症、1938年栗生楽泉園に収容された。創作、評論等を数多く発表し、同園患者自治会長などをつとめ、1970年には事実上の社会復帰を果たしている。2007年、駿河療養所で逝去した。沢田の姓の表記は、引用の場合は典拠に従い、それ以外は沢田で統一した。

(5) 以下、趙根在の来歴については、前掲、趙根在「ハンセン病の同胞たち」、及び岡村幸宣編『趙根在年譜』（前掲、岡村幸宣・小原佐和子編『趙根在 地底の闇、地上の光』215頁）を参照した。

(6) 趙は、炭鉱では命よりも、採掘のための手足を失った場合の方が、補償額が高額であったと書いている（趙根在「片割れ監修者の私記（上）」上野英信・趙根在監修『写真万葉録・筑豊 月報』5、葦書房、1985年6月）10頁。また写真家の八重樫信之は、炭鉱労働の経験によって趙根在の身体感覚が研ぎ澄まされた可能性を指摘している（原爆の図丸木美術館企画展「趙根在写真展 地底の闇、地上の光—炭鉱、朝鮮人、ハンセン病—」トークイベント「撮る人と撮られる人—趙根在さんと笹雄二さんの場合—」（2023年4月23日開催、講師：八重樫信之、会場：原爆の図丸木美術館）。

(7) 1955年6月6日、在日コリアンによって結成された「在日朝鮮中央芸術団」。1974年8月29日「金剛山歌劇団」に改名。https://www.kongozan-ot.com/02history.htm（最終閲覧2023年8月24日）。

(8) 以下、撮影地及び撮影年については、国立ハンセン病資料館2014年秋季・2015年春季企画展図録『この人たちに光を一写真家 趙根在が伝えたい入所者の姿—』（国立ハンセン病資料館、2014年）10頁を参照。

(9) この点について、齋藤君子氏よりご教示を受けた。

その間、ドキュメンタリー映像の制作に撮影担当で参加したほか、1981年には『季刊人間雑誌』に「日本国ライ収容所」として写真と朝鮮人入所者の聞き書きを掲載し⁽¹⁰⁾、1983年から86年までは上野英信に乞われて『写真万葉録・筑豊』全10巻の編集・刊行に携わった⁽¹¹⁾。その後も自宅でハンセン病と差別に関する研究を重ね、1997年に病没した。

療養所での趙は、互助会や自治会、盲人会の入所者らと、寝食を共にするなど親しく交流した。特に、何度も訪ねて多くの知己を得た、栗生楽泉園、多磨全生園、長島愛生園（岡山県瀬戸内市）、菊池恵楓園では、複数の人物を間近で撮り、患者作業の様子や監禁室、納骨堂内部、胎児標本なども撮影した。

初の写真集は、弐雄二との合作『詩と写真 ライは長い旅だから』⁽¹²⁾である。栗生楽泉園の機関誌『高原』で詩の選者をつとめた村松武司は、その書評の中で、朝鮮人として日本に生まれて炭鉱夫となり、近代日本の構造的かつ複合的な差別に対峙する視点を身体化したことによって、趙が入所者の側からハンセン病差別を問う写真を撮影し得たことを指摘している⁽¹³⁾。

趙と親しかった多磨全生園入所者の大竹章は、趙の初の個展となった高松宮記念ハンセン病資料館開館5周年記念「趙根在（遺作）写真展 ハンセン病の光と影」（1998年）の紹介文で、それらの写真を「今となっては、何れも貴重な資料とい

うより、ハンセン病療養所の歴史そのもの」と位置づけた。この点は、高松宮記念ハンセン病資料館の設立に向けて収集された各療養所の写真の中に、趙の写真が含まれていたことにも表れている⁽¹⁴⁾。

さらに大竹は、「従来、資料館では、偏見を助長する恐れがあるという考えから、余り後遺症の目立つ写真の展示は避けてきたが、今回は違う。〔中略〕彼の写真は、障害を隠して卑屈になるな、とっているように思える。即ち、人間は不自由さや変形を努力や工夫で乗り越える時が最も美しい、あるがままにあり、そのうえで正しい理解を持って貰うことが本当ではないか、そういう時代がとっくにきているのだ、と。」⁽¹⁵⁾と述べて、被写体である入所者に対して、写真の力で偏見の打破を訴えた意義を評価する。

2014年から当館で開催された企画展「この人たちに光を一写真家趙根在が伝えた入所者の姿―」⁽¹⁶⁾では、冒頭に大竹の「趙根在さんのこと―療養所へのパスポート―」が掲出され、趙が入所者を撮影するまでの経緯を詳述している⁽¹⁷⁾。

さらに2023年2月4日より、原爆の図丸木美術館（埼玉県東松山市）で企画展「趙根在写真展 地底の闇、地上の光―炭鉱、朝鮮人、ハンセン病―」が開催され、ハンセン病問題の記録としてのみでなく、近代日本の構造的な差別を被差別者の視点から表現したとして高く評価された⁽¹⁸⁾。同展では当館所蔵の趙根在写真群の全体像が明らか

(10) 趙根在「日本国らい収容所」（『季刊人間雑誌』第7号、1981年6月）、同「日本国らい収容所Ⅱ 朝鮮人 長島愛生園の仲秋」（『季刊人間雑誌』第8号、1981年9月）、同「日本国らい収容所Ⅲ 冬景」（『季刊人間雑誌』第9号、1981年12月）。

(11) 上野英信・趙根在監修『写真万葉録・筑豊』全10巻（葦書房、1984年-1986年）。

(12) 弐雄二（詩）、趙根在（写真）『詩と写真 ライは長い旅だから』（皓星社、1981年）。2001年に「皓星社ブックレット11」として改訂再刊された。

(13) 「カメラの目は、ライを対象に撮っているようにみえるが、正反対である。非ライ者の趙の目がライの側にあつて、この本を見る者を、見る。〔中略〕おそらくは、日本の近代化政策のなかでのたうち苦しんできた在日の彼の両親たち、肉親たち、彼自身の目が、思想信条や技術を越えておのずからライ者の側に立たされたものとみるべきだろう。」村松武司「弐雄二 趙根在 詩と写真『ライは長い旅だから』」（『高原』第38巻第2号、1982年2月）17頁。

(14) 例えば「除排雪作業」（松丘保養園、1977年）、「新良田高校の運動会」（長島愛生園、1970年頃）など。

(15) 大竹章「『ハンセン病の光と影』 趙根在（遺作）写真展について」（『多磨』第79巻第10号、1998年10月）36頁。同記事は佐川修・大竹章編『高松宮記念ハンセン病資料館 開館5周年のあゆみ』（高松宮記念ハンセン病資料館、1998年12月）に再掲され（49頁）、編集のうえ大竹章「趙根在さんの遺したもの」（『看護教育』第40巻第6号、1999年6月）としても公開されている。

(16) 国立ハンセン病資料館2014年度秋季・2015年度春季企画展、会期：2014年11月16日-2015年5月31日、会場：当館企画展示室。

(17) 前掲、『この人たちに光を』9頁。同図録に佐川修「趙根在さんとのふれあい」も収録。大竹・佐川は同展担当の当館学芸員・金貴粉と共に、写真の選択やキャプション作成にも関わった。多磨全生園での趙の撮影については、金貴粉「ハンセン病を撮り続けた写真家・趙根在のこと」（『抗路』第7号、2020年7月）も参照。

(18) 会期：2023年2月4日（土）～5月9日（日）、会場：原爆の図丸木美術館（埼玉県東松山市）。同美術館での開催趣旨については同館学芸員の岡村幸宣によるオープニングトークでの解説を参照（原爆の図丸木美術館「趙根在写真展 地底の闇、地上の光―炭鉱、朝鮮人、ハンセン病―」オープニングトーク記録 2023年2月5日）、https://marukigallery.jp/wp-content/uploads/2023/04/20230205chokunje_opening_talk.pdf（最終閲覧 2023年8月27日）。

にされると共に、9万字に及ぶ「ハンセン病の同胞たち」が改めて掘り起こされ、カタログに再録されるなど⁽¹⁹⁾、目覚ましい成果があった。

このように、趙の写真はハンセン病差別を被差別者の視点に立って告発するものと評価され、また入所者からはその歴史そのものであり、被写体をその内なるハンセン病への偏見から解放するものと受け止められた。またハンセン病問題と共に朝鮮人あるいは炭鉱をめぐる差別についても、被差別者の側から告発すると同時に、その作品としての力によって、見る者を魅了する存在となっている⁽²⁰⁾。

(2) 趙根在による肖像写真

作品の力との関連で注目されるのは、趙の「正面から撮影する」ことへのこだわりと、その結果として残された肖像写真である。

ハンセン病療養所では、創立以来撮影されてきた患者の収容記録のほかは、正面からの撮影はタブーであった。戦後、入所者の中にカメラを持つ者が現れたが、顔から身元が判別される可能性のある写真撮影は、被写体となった人物の家族が差別される可能性があるために忌避された⁽²¹⁾。例えば1956年に発行された写真集『離された園』について、趙は「入園者自身の撮影、いわば家族・仲間内の写真でありながら一様に見る者の目を恐れ、遠くへ逃げようとしているように見える」「写真の撮影そのものが後ろ姿や横向き、あるいは遠

くからの遠慮めいた及び腰」⁽²²⁾と批判しているが、当時はそうした写真しか撮れない状況だったのである。

趙自身は1961年6月、多磨全生園への初の訪問から帰る途中、「有形無形の壁に囲まれ、地底同様の闇にいる」入所者に自身の姿を重ね、その撮影を思い立つ⁽²³⁾。相談を受けた金奉玉は、主に在日朝鮮人を対象に、個別に同意を得ることとし、同年7月の3回目の訪問で撮影が実現した。

このように、趙はまず人に出会い、その存在を写真によって世に知らしめることを志した。従って、人物を中心に据え、肉薄した写真を撮ろうとするのは必然であった。1965年、趙が撮影手として参加したハンセン病回復者のドキュメンタリー番組「ある青年の出発」⁽²⁴⁾に出演した佐川修（金相権）は、趙から「佐川さんはカメラを顔へ近づけてもびくともしないね」と言われたという⁽²⁵⁾。「佐川さんは〔傍点引用者〕」という表現からは、他の入所者から顔のズームアップを拒否された経験があったことが推測できる。趙が被写体にレンズを「近づけて」写真を撮るまでに、それぞれの対象とのやりとりがあったことをうかがわせるエピソードである⁽²⁶⁾。

そのうえで、一人の被写体を、間近でかつ大量に撮影しているケースもあることに注目したい。これらは、撮影を避ける人が多い療養所の中で、趙根在と被写体との間にカメラによる生活への侵襲を許容する関係が形成されていたことを示して

(19) 注1参照。

(20) 前掲、原爆の図丸木美術館「趙根在写真展 地底の闇、地上の光—炭鉱、朝鮮人、ハンセン病—」オープニングトーク記録を参照。岡村幸宣は別のトークイベントで、趙の写真について「資料（生活記録）としての意味が、観る者を引き付ける作品としての強度によって増幅されている」と述べている（『現代詩手帖』4月号「特集・ハンセン病の詩」刊行記念イベント～「ハンセン病文学の新生面『いのちの芽』の詩人たち」展と「趙根在写真展 地底の闇、地上の光—炭鉱、朝鮮人、ハンセン病—」展 関連企画～木村哲也（国立ハンセン病資料館学芸員）、岡村幸宣（原爆の図丸木美術館学芸員）トークイベント」（期日：2023年4月7日 会場：忘日舎（兼オンライン配信））。

(21) 入所者同士のプライベートスナップや、全患協（全国癩療養所患者協議会、のち全国ハンセン病療養所患者協議会、現在の全国ハンセン病療養所入所者協議会）及び各療養所の自治会運動において撮影された記録写真には、顔が判別できるものもある。運動をめぐる写真では、主として団体の代表など、療養所の有力者であり、軽症のうちに快癒した壮年の男性が被写体の多数を占める。

(22) 前掲、趙根在「ハンセン病の同胞たち 7 撮る」188頁。

(23) 前掲、趙根在「ハンセン病の同胞たち 6 再び全生園へ」185頁。着想の背景には、前年に発行されていた土門拳『土門拳写真集 筑豊の子どもたち』（パトリア書店、1960年）への違和感と、金に見せられた岩波書店編集部・岩波映画製作所編『離された園』（岩波書店、1956年）への不満があったという。趙根在「哀哭・上野英信先生」（上野英信追悼録刊行会編『追悼 上野英信』上野英信追悼録刊行会、1989年）301頁、趙根在「ハンセン病の同胞たち 6 再び全生園へ」186-188頁。

(24) 1965年12月16日、TBSテレビ「人間シリーズ」。演出・中山節夫。佐川修のほか、多磨全生園、菊池恵楓園の入所者や職員が登場人物として撮影された。この時の、趙ともしき撮影手の写真が『多磨』（第47巻第2号、1966年2月）の表紙見返しに掲載されている。

(25) 前掲、佐川修「趙根在さんとのふれあい」1頁。

(26) 趙は、女性、子ども、重病棟や重不自由舎、精神病棟入室者なども撮影しているが、撮影を始める際に金奉玉から「盗み撮り」を禁じられているから、被写体の許可を得ていたのだろう。いずれも緊張感はさほど感じられない。前掲、趙根在「ハンセン病の同胞たち 7 撮る」188頁。

おり、二郎もその一人だった。

なお、二郎がそうであるように、趙が撮影したのは朝鮮人だけではない。例えば栗生楽泉園では、在日朝鮮人一世の金夏日と共に⁽²⁷⁾、詩人の衍雄二、衍と親交が深く創作を志していた二郎と、その実弟で金夏日に点字を教えた歌人の沢田五郎⁽²⁸⁾、俳人高橋夢一らの写真も大量に残されている。彼らには、いずれも文学を志し、盲人会にもかわりをもつという共通点がある。また金夏日以外は日本共産党員であった。同じく党員で、のち沢田二郎と共に印刷工場を支えた岸従一、その妻でタイピストだった岸千恵子もしばしば被写体になっている。

このように、趙は人脈によって「その人」に出会い、撮影を通じて交流を重ねた。その結果、「ハンセン病患者」や「療養所」でなく、「その人」の姿を撮影することになったのである⁽²⁹⁾。大竹章は趙の撮影について、障害を異物として撮影するのではなく「むきだしの命が、生きるためのたたかいが、血よりも濃いモノクロにより、幾つもの物語として現実から切り取られている」⁽³⁰⁾と書いた。ここでいう「幾つもの物語」は、被写体それぞれの差別や障害との向き合い方、つまり「その人」の物語を、趙が撮影しえたことを指しているだろう。

2. 沢田二郎のこと

栗生楽泉園で趙が撮影したひとりが、沢田二郎である【図1 以下写真はすべて1966年撮影】。

二郎は小学5年生の時にハンセン病を発病⁽³¹⁾、1938年10月28日に自宅から自動車で栗生楽泉園へ強制収容された⁽³²⁾。



図1

収容後の二郎は数年で重体になるも園内で文学を志し、回復後は不自由舎居住者として初の自治会長に就任した。さらに療養所外の女性と結婚するため社会復帰して自営業を営み、その後再び療養所へ入所した。すなわち同時代に重度の後遺症を負っていたハンセン病患者・回復者としては、きわめて稀な経歴の持ち主であった⁽³³⁾。そのためか、自伝を含む著述を数多く残したものの、その個人史はこれまで注目されてこなかった。

そもそもハンセン病療養所では、隔離による共通の被害から逸脱したストーリーを表現することは困難だった⁽³⁴⁾。例えば、1960年をピークに3,000

(27) 金夏日『無窮花』（光風社、1971年）。金夏日と趙根在との関係については前掲、原爆の図丸木美術館「趙根在写真展 地底の闇、地上の光—炭鉱、朝鮮人、ハンセン病—」オープニングトーク記録」における吉國元のコメントを参照。

(28) 栗生盲人会「座談会 四十年の回顧」（『栗生盲人会創立四十周年記念文集 あしあと』1976年）14頁。

(29) 同時代、外部のカメラマンが入所者を正面から撮影した例は皆無ではない。1969年9月、沖縄愛楽園で撮影を行った松村久美は、愛楽園での撮影時に「男前の顔を撮ってくれ」と居直ったようにレンズを凝視する人」があり、夫婦舎では正面からの撮影が許されたとしている（松村久美『片想いのシャッター 私の沖縄一〇年の記録』（現代書館、1983年、36頁）。また1974年12月から1976年1月まで、同じく沖縄愛楽園を訪れた鈴木幹雄による写真にも、至近距離で正面から入所者を撮影したものが含まれる。松村久美の撮影については写真家の小原佐和子氏より、鈴木幹雄による撮影については沖縄愛楽園交流会館学芸員の辻央氏よりご教示を受けた。

(30) 前掲、大竹章「趙根在さんのこと」9頁。

(31) 沢田二郎『「らい予防法」で生きた六十年の苦闘 第一部 少年・青年時代』（皓星社、2002年）11頁。なお沢田二郎と、弟の沢田五郎の姓名は共に、1935年に入所していた従兄弟がつけた園名である（衍雄二・福岡安則・黒坂愛衣編『栗生楽泉園入所者証言集 中』栗生楽泉園入園者自治会、2009年、16頁）。

(32) 沢田五郎は当時の様子を「〔小学校〕一年生の私が早々と授業を終わって帰る道で、その車に遭った。二郎は車の中で人に見られないように身を縮めているらしく、こちらを見なかった。」と記している（沢田五郎『風荒き中を』（皓星社、2003年、35頁）。

(33) 沢田二郎は社会復帰して生活した15年間、栗生楽泉園の元保育所を印刷工場として使用する権利の関係で、同園に籍を置いていた。従って記録上は、入所から1988年8月19日までの約50年間、同園入所者であった。社会復帰の形の多様性については国立ハンセン病資料館2012年度春季企画展図録『青年たちの社会復帰—1950-1970—』（国立ハンセン病資料館、2012年）5頁を参照。

(34) 蘭由岐子「生活史を語ることの困難—あるハンセン病患者の語りから」（『歴史評論』656号、2004年12月）。

人以上が社会復帰したにもかかわらず、その経験が語られる機会は少なく、療養所へ再入所した人にとっても同様の状況がある⁽³⁵⁾。しかし二郎は、社会復帰を断念し、駿河療養所へ転入所して以降も、自伝を含む複数の著作を残し⁽³⁶⁾、その中で社会復帰の経験も詳細に書き残した。つまり、社会復帰の経験を著したという意味でも、特異な存在だった⁽³⁷⁾。加えて弟の五郎も、その著作でしばしば兄について言及している(後述)。二郎はその足跡を、本人及び身近な人物による複数の著作から追うことが可能な社会復帰経験者でもあった。

次に、趙が撮影した二郎の写真とその自伝や創作、五郎による著述や短歌をもとに、写された人すなわち二郎の輪郭をたどってみる。

(1) 沢田二郎の来歴と写真群の特徴

趙による二郎の写真は、わかる範囲で、1966年に121点(うち12月撮影が110点)、1967年に12点、1980年に10点(五郎の第二歌集『朴の風ぐるま』出版祝賀会)が撮影されている。それらに加え、草津町内に自宅を新築した際の披露の宴(1983年10月)での写真(複製)が確認されている。

最も点数の多い1966年12月の写真から、自治会長としての執務の様子をはじめ、食事、治療、自室での様子などを追ってみよう。

二郎は平日の朝、不自由舎(赤城寮)から自治会事務所へ出勤する【図2】。足穿孔症や変形があったものの、二郎は晩年まで自足歩行していた。また自治会長として療養所や入所者団体との打合せを行うシーンも多く撮影されている【図3】。寮の食堂では、包帯を巻きつけた右手にスプーンを差して米飯をすくっている【図4】。その合間



図2



図3

に外科にも通い、足穿孔症や手指の傷のケアを受けている【図5】。

これらの写真からまずうかがえるのは、二郎が重い障害と共に生きる様子である。二郎の症状は多菌型で、収容前から顔が腫れ、眉毛が抜け落ちていたという⁽³⁸⁾。入所後いったん症状が落ち着くと、病棟の付添看護、六合村への炭背負い、地獄谷からの薪の背負い上げなどに従事し、自室周辺で畑仕事もしていた。これらの重労働が、その後の重篤化を招くことになった。

急速に症状が進行したのは、1944年1月の「特

(35) 西浦直子「らい療養所からの青年たちの「社会復帰」をめぐる一—1950年～1970年 日本」(『国立ハンセン病資料館研究紀要』第4号、2013年3月)。

(36) 沢田二郎は、自伝的なテキストを複数回執筆・発表している。(1) 栗生楽泉園入所から社会復帰・自宅建設まで(発行年順):①澤田二郎「光明を求めて—私の場合—」(『楓の蔭』第212号、1949年6月)、②前掲、沢田二郎「『らい予防法』で生きた六十年の苦闘 第一部 少年・青年時代」、以下『第一部』と記載、③沢田二郎「『らい予防法』で生きた六十年の苦闘 第二部 もしもし私は人間です」(皓星社、2004年)、以下『第二部』と記載、④沢田二郎「『らい予防法』で生きた六十年の苦闘 第三部 廃者復活ものがたり」(皓星社、2005年)、以下『第三部』と記載、⑤沢田二郎「感謝にかえて」(『JLM』第612号、1984年10月)、(2) 社会復帰断念後、駿河療養所入所を含む時期まで(発行年順)、⑥沢田二郎「人間能力への挑戦 一四十六歳での社会復帰—」(山本節子・朝日新聞大阪厚生文化事業団幹事編『遥けくも遠く ハンセン病療養所在園者聞き書き集』(朝日新聞大阪厚生文化事業団、1998年))、⑦「甲第一〇〇八号証 陳述書」、「本人調書」(ハンセン病違憲国賠裁判全史編集委員会編『ハンセン病違憲国賠裁判全史 第8巻 被害実態編 東日本訴訟』(皓星社、2006年)、以下「陳述書」「本人調書」と記載)。③、④は口述筆記。

(37) 沢田二郎と同時期に社会復帰をし、かつその経験の記述を含む自伝的著作を残した人物に鈴木重雄(田中文雄)と伊波敏男がいる。鈴木重雄については、田中文雄『失われた歲月』(皓星社、2005年)、及び松岡弘之『鈴木重雄の社会復帰』(松岡弘之『ハンセン病療養所と自治の歴史』みすず書房、2020年)、伊波については伊波敏男『花に逢はん』(日本放送出版協会、1997年)を参照。

(38) 前掲、沢田二郎「陳述書」467-470頁。多菌型はハンセン病の病型の一つで、浮腫や結節などを伴う。化学療法開発以前は、症状が進行すると全身に結節ができるなどの症状が出ることがあった。



図4



図5

別看護」と呼ばれる24時間労働がきっかけだった⁽³⁹⁾。1945年には左目を失明、全身に結節がはじまっていたもののさらに労働を続けた結果、「包帯四巻、リバノール、ガーゼ数十枚、絆創膏、軟膏、等々のおびたゞしい治療材料を必要と」⁽⁴⁰⁾し、栗生楽泉園内で最も包帯交換に時間を要する「横綱」と呼ばれた。1947年には喉頭結節が発現し、1948年1月に窒息を免れるため麻酔なしで気管を切開した⁽⁴¹⁾。症状の苦痛に加え、回復が見込めない絶望と、かつて看護人として目にした患者の無惨な最期が重なり合い、苦悩した二郎は自殺目的で昇

汞^{こう}を入手したこともあった⁽⁴²⁾。

1948年、弟五郎からプロミン注射の権利を譲り受け、11月から毎日5ccのプロミンを17本打ったところで「体中に七〇数カ所あった結節性の傷が数カ所にまで減り」⁽⁴³⁾、発熱も消えて劇的に軽快した⁽⁴⁴⁾。快癒の喜びを、二郎は「さあ！癩者が治る秋が来た。」「瘍が、すっかり治り二月中旬、重病棟を退室して、今日では切開した咽頭も近々に塞いで、[中略]カニューレの前え吊した、首のガーゼをピラピラさせながら三丁余もある病院へ、毎日難無く通つて居る。』⁽⁴⁵⁾と歓喜を表現している。

症状は軽快したものの、両手指はこの後、知覚神経麻痺による二次障害でほとんど失われた。下肢は変形し、足穿孔症に悩まされることになった⁽⁴⁶⁾。意に反して左眼球を摘出した際に上下瞼を切除されたため、後の義眼挿入の手術は難航した⁽⁴⁷⁾。

写真からは、こうした障害がはっきりと伺える。【図1】では、左眼窩の義眼が斜め上を向き、指の失われた左手で新聞を押さえている。右手にはペンやフォークを差し込む包帯が分厚く巻かれており、おそらくやけどを防ぐための「空巻き」を兼ねていたものだろう。【図3・4】で左目に当てているガーゼは、目の周りの皮膚の乾燥を防ぎ⁽⁴⁸⁾、かつ斜め上を向いて挿入された義眼を隠す意図があったと思われる。鞍鼻も著しく、鼻呼吸がしにくかったためだろう、唇が完全に閉まっていない場面も多い。趙が間近で撮影した人のうち、二郎は最も後遺症の重い一人といえるだろう。

そして二郎の写真のもう一つの特徴は、執筆の場面が多いことである。1966年に撮影された121点のうちの42点が、文机に向かってものを書く姿

(39) 隣室の患者がガス壊疽で入院し、依頼されて12日間連続で終日看護を行った。氷点下10℃を下回る屋外で氷嚢を作るなどの仕事を続けたという。前掲、沢田二郎『第一部』128-143頁。

(40) 前掲、沢田二郎「光明を求めて」1頁。

(41) 前掲、沢田二郎『第二部』49頁。

(42) 前掲、沢田二郎『第二部』28頁。昇汞は水銀の塩化合物で猛毒。

(43) 前掲、「陳情書」471頁。この体験から、二郎は1948年からのプロミン獲得闘争には積極的に参加した（「陳情書」472頁）。

(44) 前掲、沢田二郎「光明を求めて—私の場合—」1頁。のちに、当時栗生楽泉園に入所していた佐川修が語り部活動の中で「注射を始めて3か月もたつと歌が歌えるようになった」と話したのは、二郎のことと思われる。

(45) 前掲、沢田二郎「光明を求めて—私の場合—」1頁。

(46) のちの記述にはしばしば足穿孔症に悩む様子が綴られている（前掲、沢田二郎『第二部』93-94頁など）。

(47) 前掲、沢田二郎『第二部』176-177頁。

(48) 齋藤君子氏のご教示による。

である。右手にぐるぐる巻いた包帯にペンを差し、手帳を脇に開いて、原稿用紙のマス目を埋めている。左目を失い、右目も視力が十分でなかったため、紙に顔をこすりつけるようにして書いていたことがわかる【図6・7・8】。

なお二郎は小学6年生以後、正規の学校教育を受けていない。栗生楽泉園では、1954年に草津小中学校第一分校が開設されるまで、教師の経験をもつ患者が自室などに学齢児童を集めて授業を行った⁽⁴⁹⁾。1938年に入所した二郎が学習を続けるには、その私塾で学ぶか、園内で入手できる雑誌などを読むしかなかった。

書くことに熱中し始めたきっかけは、1945年の兄の戦死である。郷里の両親を養うため、二郎は療養所にいながら収入を得られる職業として小説家を目指し、1947年に創作の勉強会「山鳩会」⁽⁵⁰⁾



図6



図7



図8

を立ち上げた。1949年に二度目の気管切開を伴う重態に陥るも、回復後には「山鳩会」の後身となる「栗生創作会」を立ち上げ、活動を再開した。1961年にはその会長として、文芸作品（散文・雑文）の選評も依頼されている⁽⁵¹⁾。

栗生楽泉園で入所者が編集・発行していた『高原』や他園で発行された園内誌には、二郎の創作と、それへの選者による評⁽⁵²⁾、演芸への批評や時事評⁽⁵³⁾、自治会長就任後の会議の報告などが掲載されている。点数は評論45、創作16、随想10、挨拶9、ほか追悼文や支部長会議の報告などを含めると90点に及ぶ⁽⁵⁴⁾。社会復帰中も、わずかではあるが随筆や評論を発表している⁽⁵⁵⁾。1999年にはハ

(49) 栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋 栗生楽泉園患者50年史』（栗生楽泉園患者自治会、1982年）443頁。

(50) 山鳩会は1947年、沢田二郎や、後にらい予防法闘争の敗北を悔いて自殺した金子勇らが、青少年を集めて文法を学ぶ集まりとして結成。教材として詩を用い、また同時期に多磨全生園から転園して『高原』に詩を発表していた笹雄二らの活動とも重なり、1952年の栗生詩話会結成につながった。前掲、栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋』371頁。なお同年、沢田二郎、五郎と笹雄二は自由地区の千葉寮で共同生活をしていった。

(51) 沢田二郎「秋季文芸募集作品評」（『高原』第16巻第12号、1961年12月）。

(52) 最も早いものは澤田二郎「<創作>過ぎて行く」、柴田錬三郎「選後評」（『高原』第6巻第6号、1951年10月）。

(53) 澤田二郎「劇評 第七回演劇発表会を観て」（『高原』第7巻第3号、1952年6月）など。

(54) 国立ハンセン病資料館機関誌横断検索システムにてフリーキーワード「沢田二郎」「澤田二郎」で検索（2023年8月30日）。

(55) 前掲「感謝にかえて」（1984年）、沢田二郎「消えゆくハンセン病の悲劇」（『高原』第40巻第12号、1984年12月）。

ンセン病国賠訴訟（東日本訴訟）の最初の原告の一人としてその半生を「陳述書」に綴り、さらにこれをもとに自伝『「らい予防法」で生きた六十年の苦闘』を発行した。なお、社会復帰後は印刷所を経営し、その発行物の校正を担当した⁽⁵⁶⁾。このように発病後の二郎の人生は書くこと、著すことに貫かれていたといえる⁽⁵⁷⁾。

弟の五郎も、書く人であった。5冊の歌集のほか、特別病室（「重監房」）の記録『とがなくてしす』⁽⁵⁸⁾、小説「泥えびす」⁽⁵⁹⁾や『創作 野ざらし』⁽⁶⁰⁾などを著し、前述のように二郎について書かれた部分もある。二郎の社会復帰後は、その跡を継ぐように創作会に所属した⁽⁶¹⁾。

以下、二郎のいくつかの著作を用いてその足跡をたどる。その際、戦時下の運動をめぐる挫折、ホスピタリズムとの対峙、不自由者として再び運動の中心に立つ経験にポイントを置き、それらを経た二郎が、趙の写真をどのように受け止めたかを検討する。

（２）「17年事件」とその後の運動の経験

二郎が初めて患者運動に関わったのは、特別病室（「重監房」）の打ちこわしを企図した1942年11月の「17年事件」である。二郎は当時17歳で、計画の拠点となった天城寮（男子独身軽症者寮）⁽⁶²⁾に居住していた。事件は、療養所職員と通じた五

日会役員によって事前に抑え込まれ、目的を果たすことなく終わっている⁽⁶³⁾。

二郎は自伝で、計画の詳細は知らされなかったとしている⁽⁶⁴⁾。しかし同園入所者の中原弘が「二郎さんなんか諦めきれねえで、またやるつつつて、それで校長〔藤原時雄〕に連れて行かれたんだよ」と話し⁽⁶⁵⁾、また同事件について最も早い時期に書き残した水沢定作は、「気持ちの納まらない青年団の若い人々」に対し「H」が切り崩しを図ったとしている⁽⁶⁶⁾。「H」は当時五日会⁽⁶⁷⁾会長で園内学園の教師でもあった藤原を指すと思われることから、かつてその教え子だった二郎が事件に深く関わったと見なされていた可能性もある。

1960年の創作「あいびき」で、二郎は、患者労働に邁進する太平洋戦争中の青年たちの姿を「人類の最低でうごめく彼等が、却って一般社会の人間より愛国心や生活意欲が旺盛で、畑作りや、松根掘りの奉仕に、文字通り血みどろになって働いているのである。自分は御国の御役に立たないのだからと、心から詫びているように、ひどい仕打ちの職員に平身低頭する。」⁽⁶⁸⁾と書いている。本作には、自伝に記されたシーンが随所に織り込まれており、「17年事件」後の二郎自身とその周辺を描いたものと想定できる。敗戦前の二郎は小柄ながらがっちりとした筋肉質になっていたというか

(56) 沢田タイプ印刷所（のち沢田印刷所）では、沢田五郎の著作や、二郎の自治会長就任時に副会長を務めた名草良作の作品も発行している。沢田五郎『沢田五郎短編集 その土の上で』（私家版、1971年）、沢田五郎『林の風ぐるま』（新日本歌人協会、1980年）、名草良作『生きものの刻 名草良作創作集』（私家版、1972年）。

(57) この点に関連して、趙根在が沢田二郎との交流によって後年の執筆活動のきっかけを得た可能性が、編集者の文弘樹により指摘されている。国立ハンセン病資料館ミュージアムトーク2023「趙根在が写した「その人」の物語をよむ」質疑を参照。https://www.youtube.com/watch?v=7fU6pnQTKbl（最終閲覧：2023年8月30日）。

(58) 沢田五郎『とがなくてしす 私が見た特別病室』（ぶどうばん通信、1998年）、同改訂版『とがなくてしす 草津重監房の記録』（皓星社、2004年）。本稿での引用は改訂版による。

(59) 『多磨』（第47巻第2号、1966年2月）に創作部門の入選作として初出。選者の阿部知二に絶賛された。後に前掲、沢田五郎『その土の上で』所収。

(60) 沢田五郎『創作 野ざらし』（ぶどうばん通信、1991年）。

(61) 栗生創作会編『残影』（栗生楽泉園慰安会、1973年）。参加者は名草良作、星政治、沢田五郎。

(62) 前掲、栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋』183-184頁。

(63) 事件の原因と経過については前掲、栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋』193-200頁参照。

(64) 前掲、沢田二郎『第一部』95頁。

(65) 沢田五郎『重監房のこと、不自由者の結婚……』（前掲『栗生楽泉園入所者証言集 中』）34-35頁。

(66) 水沢定作「十七年十月斗争のこと」（『高原』第13巻第7号、1958年7月）14-15頁。

(67) 栗生楽泉園の患者自治組織。1935年1月発足。施設に協力的であったとして戦後批判的となり、1947年4月に名称を「総和会」と変更、後に栗生楽泉園患者自治会となる。前掲、栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋』122頁、228頁。

(68) 沢田二郎「あいびき」（栗生創作会編『黒い炎の影』文理書院、1960年）49頁。

ら⁽⁶⁹⁾、やはり「血みどろになって働いた」のだろう。

弟の五郎は、この時期の青年たちについて、「やらなければならないならいっそのこと、と思ったかどうか、かつての不平不満をかなぐり捨て、園への忠誠を示すかのように、率先してそれらの仕事を目いっぱいやる者が出た。転向である。」と記している⁽⁷⁰⁾。隔離されて「御国の御役に立たず、園内の改革も抑え込まれた青年たちは、労働に打ち込むことで精神的に生き延びたものの⁽⁷¹⁾、それと引き換えに重症化していった。

二郎も重労働を担い、症状を悪化させた結果、限られた身体機能と共に生き続ける意味を探索することになった。気管切開の痛みと、「のど切り三年」と言われた絶望の中で、二郎は「死ぬまでに自分の生まれてきたこと、あるいは人間とはどういうことなんだということだけ、せめてそれだけでも知ってから死にたい」⁽⁷²⁾と考えていたという。患者運動に挫折し、身体を壊すと知りながら奉仕作業にまい進した結果、取返しのつかない状態に陥ったことへの口惜しさを、後に創作「生き残り」⁽⁷³⁾の中で、「大体今頃迄生きて居る筈ではなかったと言う事を誰よりも良く彼等自身が知って居た」という言葉で吐露している。

敗戦直後の1947年、「重監房」での非道と療養所職員による横領等を暴いた「人権闘争」⁽⁷⁴⁾で、二郎は入所者の団結のための署名・捺印を拒否し

ている⁽⁷⁵⁾。後の自伝ではその理由を、共産党や社会党など外部の力を借りずに総和会（自治会）が自力で解決すべきと考えたからとしているが⁽⁷⁶⁾、背景には「17年事件」で五日会が弾圧に回ったこと、その幹部だった入所者が、今や患者の権利と団結を訴えていることへの反感もあったのだろう。

しかし署名拒否によって、二郎はじめ少数派13人は患者集会で糾弾されることになった。それについて二郎は「世の中を見る目が実に浅かった」「自分の気持ちとまったく違う大勢の人の気持ち、これは誠に怖い問題だとこの時痛感」⁽⁷⁷⁾したと書いている。戦時下の運動に挫折し、国策としての隔離下でアイデンティティの崩壊とその再構築を迫られた二郎にとって、かつて職員の側についた入所者幹部が、人権闘争ではガラリと態度を変えたこと、またそれに違和感を持たない「大勢の人の気持ち」とは、衝撃を以て受け止められた⁽⁷⁸⁾。

1953年のらい予防法闘争をめぐる評論で、二郎は「自分自身の手によって、自分自身の人権も、生活権も、人間性も努力によってまもらなければならないことを知った」⁽⁷⁹⁾と書いている。これを、集団による運動の在り方としてだけでなく、自身の生きる指針として読めば、二郎は自分で進路を切り開く態度を、こうした経験によって身に付けていったとも解釈できる。

もっとも、集団での運動から距離を置いたわけ

(69) 沢田五郎によると1943年頃の二郎は「上背はなかったが、裸になると腕も胸も腿も筋肉がもりあがり、良い体をしていた」という（沢田五郎『風荒き中を』皓星社、2003年、131頁）。

(70) 前掲『とがなくてしす』94頁。

(71) 1964年、フレンズ国際ワークキャンプ（FIWC）の大学生と懇談した二郎は次のように述べた。「最初のうちは、出てやろうと思って色々努力をしたが、取り締りは厳しく、ついに我々は「ここで一生を送るのだ」とあきらめて、やっと、園内に落ち着いた。そのように思い込まないと苦しくて、生きて行けなかった。」「君は絶望という言葉を知っているかい…。FIWCによる聞き書きメモ（NPO法人むすびの家所蔵、1964年作成）。なおメモでは沢田二郎を自治会長と記しているが、当時は不自由舎常会連合会会長。

(72) 前掲、「本人調書」492頁。二郎だけでなく、重症化を経験したひとりである笹雄二もまた、自身にとっての文学の意義について「自分はいたい何なのか」を追求することであると述べている（国立ハンセン病資料館証言映像「笹雄二さん」2006年収録）。

(73) 澤田二郎「生き残り」（『高原』第7巻第1号、1952年2月）。

(74) 重監房の実態を暴き、食料の横流しや患者への圧政などを行っていた関係職員の更迭と「重監房」の廃止を要求した。この折に強制労働や劣悪な医療などが告発され、国会からも視察団が訪れるなど療養所内の劣悪な処遇が明るみに出た。

(75) 前掲、沢田二郎『第二部』40頁。当時二郎は体調が悪く積極的に参加しなかったようだが、軽快時には集會に出かけていた。前掲、「陳述書」471頁。

(76) 前掲、沢田二郎『第二部』40-41頁。

(77) 前掲、沢田二郎『第二部』40-41頁。

(78) 二郎のちに、藤原時雄とその教え子をモデルにした創作を7回にわたって『高原』に連載した（沢田二郎「胸奥の棘一この一篇を藤原時雄先生と鈴木義雄君の霊に捧げる」）（『高原』第44巻第1号、1988年1月～第44巻第7号、1988年7月）。主人公の「藤岡」は藤原をモデルとし、生徒で後に「重監房」で死亡する鈴木義雄が「鎬木」と思われる。ここでは「藤岡」は、隔離政策に怒りを表明する人物として描かれている。

(79) 沢田二郎「〔ライ予防法改正運動の過程から〕運動の成果」（『高原』第8巻第7号、1953年9月）11頁。

ではない。二郎が栗生楽泉園の患者自治会長に就任中の1966年末、多磨全生園患者自治会が一時閉鎖に陥った。その際、二郎は『全患協ニュース』に「私たちは弱いものです。運動の武器は団結以外ありません。」⁽⁸⁰⁾と書いている。この間、後述のように共産党に入党し、一方で晩年には「17年事件」での失敗は必然だったと回顧しているから⁽⁸¹⁾、二郎の考え方は少しずつ変化していたのだろう。何より、園内誌への投稿や自伝からは、表現こそ率直で厳しいが、ユーモアや遊びのある場面が多く見られ、周囲の見解も柔軟に受け止めているようである⁽⁸²⁾。

ただし、ハンセン病患者、回復者として稀有な人生を歩んだ背景には、ハンセン病療養所内のつながりのみに依って生きることへの躊躇と、幅広く意見を乞うが判断は自身で着実にやるという態度があったものと思われる。

そして何より、二郎は「家畜的心理」、すなわちホスピタリズムと対峙しなければならなかった。

(3) ホスピタリズムに向き合う

1952年2月、二郎は創作「生き残り」⁽⁸³⁾を発表する。プロミン治療によって一命をとりとめた青年たちが、生き延びた故に苦悩する姿を描き、選者の柴田錬三郎によって同号の創作第一席となった。

「前途に、最早何の希望も快樂も持ち得ない、謂わば墓底での生存、の様な存在者」⁽⁸⁴⁾となった重病室の青年たちは、プロミン治療によって病状が好転するが、それまでと異質な苦悩を抱くようになる。「彼等の喜びは今度は逆に知性を失つて途方もなく飛躍した。切断した足が再び萌え目が

開き、屈曲した指が伸びて、登山が出来、野球ができて、恋ができるようになる」「彼等はそうしたことを本気で空想し前途洋々として果〔て〕しがないのだつた」「〔しかし〕失つたものは何一つ戻る事はなく、かつて彼等自身の願望通り、手も足も眼も鼻も命の代償にとられた儘、金輪際回復しないのだつた。」「ベツトえ運ばれだ飯を食い、日に数回トイレ通う事が活動の全部だった。」⁽⁸⁵⁾。治らないという絶望から、治っても元には戻らないという絶望に再度突き落とされたのである。

こうして生き続ける肉体と向き合う姿として、さまざまな欲求が描かれるのも必然であった。柴田錬三郎が本作について「性本能の烈しさと四つに組んだ効果は充分にあがっている」⁽⁸⁶⁾と評したように、「生き残り」では生殖はもとより、自ら快感を得ようとする行為も困難になった主人公「荒木」の焦りや、その様を人目にさらしたことへの衝撃などがつぶさに書かれている。性の問題は、二郎にとっては療養所での生を表現する重要なテーマだった⁽⁸⁷⁾。

また重症化した人びとが、食や排泄の営みにわずかな自由を得ようとする描写には、ホスピタリズムへの抵抗も垣間見える。例えば、全盲の「塚田」がベッド上での排便介助を受けることに耐えられず、這って汚れた便所へ向かう姿を目撃した「荒木」は「一馬鹿野郎」とど鳴つてやりたい気がした。あんなに迄してトイレ行かなければならぬ塚田の気持ちには、同情を通り越して腹が立つ。「なぜもつと毅然とした態度で居られないのだらう？」と憤る。そして一見、排泄の自立を目指すとも思われる盲人のふるまいを「奴隷根性、家畜性」⁽⁸⁸⁾の表れとし、介護する者への気兼ねに苦し

(80) 沢田二郎「弱い者たちの武器」(全国ハンセン氏病患者協議会編『全患協ニュース』No.288、全国ハンセン氏病患者協議会、1967年1月1日)1面。

(81) 前掲、沢田二郎『第二部』39頁。

(82) 例えば1958年に高原編集部が催した座談会では、二郎を含む入所者4人と看護師4人が参加して、和気あいあいと話しかけ合う様子が記録されている。二郎は「俺の片よった見方かもしれんが」「俺も全面的には否定しないけど」など多様な考え方に目配りをする様子がみられ、場を和ませる場面もみられる(高原編集部「〔座談会〕「人間の条件」を読んで」『高原』第13巻第12月、30頁)。

(83) 前掲、澤田二郎「生き残り」30頁。

(84) 前掲、澤田二郎「生き残り」30-31頁。

(85) 前掲、澤田二郎「生き残り」32-33頁。

(86) 柴田錬三郎「選評」(『高原』第7巻第1号、1952年2月)40頁。

(87) 例えば前掲の「あいびき」での主題は、女性を妊娠させ社会復帰を迫られる主人公が、療養所の変革という自己の存在意義と性愛との葛藤に悩む姿である。

(88) 前掲、沢田二郎「あいびき」38頁。

むさまを「劣等心理」と看破した。なお「生き残り」を発表した年、二郎は「主体性」とホスピタリズムの相克について論じた評論「癩者の使命」を発表し、ここでも「家畜的因習」の打破を主張している⁽⁸⁹⁾。

この間、自身の障害の悪化も続き、1954年1月には弟の五郎と、弐雄二との同居を解消し、不自由舎の赤城寮へ転居した⁽⁹⁰⁾。苦境の中で、二郎のホスピタリズム批判は鋭さを増した。1956年に発表した「〈創作〉植毛の夢」では「〔調理場から〕吐き出される三度の飯は、園内の隅々に滲みてゆき、人々の脳味噌を破壊する。そして全ての人々を生活の現実からひきはがす……」⁽⁹¹⁾と書き、療養所という場が主体性を奪い、自立を挫く環境であることを鮮やかに示している⁽⁹²⁾。

では二郎は、その葛藤からどのように脱け出そうとしたのだろうか。

(4) 不自由者の処遇改善運動へ

「生き残り」を発表した翌1953年、二郎は盲人会員の点字習得への取り組みを高く評価する文章を発表している⁽⁹³⁾。失明者たちが、蔑まれながらも自ら可能性を拓く姿を、療養所内にまん延するホスピタリズムに対比させることで、二郎はようやく「家畜病的心理」からの脱却につながるイメージを描くことができたのだろう。この後、二郎は一時的な失明に陥るものの、朝日訴訟に衝撃を受け⁽⁹⁴⁾、1958年には弐雄二と水田（中原）弘の誘いで日本共産党に入党している。

この頃、栗生楽泉園では社会復帰と労務外出⁽⁹⁵⁾が増加していた。労務外出者と、安価な作業賃しか得られない園内作業員、あるいは慰安金増額を要求する不自由者との収入の格差が開き、経済的不均衡によって要求の齟齬が顕著になった。また療養所運営における患者作業の比重が減少し、自治会が担ってきた作業の統括の役割が相対的に軽くなったため、比較的高い収入を得られる障害の軽い入所者にとっては療養所への要求機関としての自治会の存在意義が薄れていた。収入が少なく労ばかり多い自治会役員のなり手はいなくなり、執行部が成立しても短時間で辞任する状況が相次いだ。こうした自治会存続の危機が、早い時期から現れたのが、栗生楽泉園や多磨全生園といった、労務外出や社会復帰者が相対的に多い療養所だったのである。

そこには所内に生じていた、障害の度合いによる階層の問題も絡んでいる。前出の創作「あいびき」で二郎は、軽症者が「重症者のことは出来るだけやらない工夫をしている」「園内も全く生存競争」⁽⁹⁶⁾と表現している。発表当時、二郎は不自由舎常会連合会長に就任し、障害の重い入所者の処遇改善に傾注しているから、小説の舞台こそ1944年であるが、執筆当時の園内の状況も反映されていると考えてよい。主人公が療養所内の処遇改善に理想を掲げ、「退園など、とんでもなくなった」⁽⁹⁷⁾と考える姿は、自身のものだった可能性もある。

1965年1月、二郎はさらに、栗生楽泉園総和会

(89) 『高原』（第7巻第5号、1952年11月）28頁。

(90) 弟の五郎はこの同居解消について、「（一人の部屋に移る）雑居の暮らしかき移り行かん我等三人冷たき酒をここに汲み合う」と詠んだ（前掲、沢田五郎『朴の風ぐるま』44頁）。なお五郎は翌年失明している（前掲、沢田五郎『創作 野ざらし』、奥付「著者略歴」）。

(91) 沢田二郎「〈創作〉植毛の夢」（『高原』第11巻第10号、1956年10月）26頁。

(92) 翌年、森幹郎「濫救惰民」（『楓』第11巻第5号、1957年5月）が発表され、入所者間に議論を巻き起こした。二郎はこれについて、国賠訴訟の陳情書の中で「強制隔離政策を見ていない論外の意見」ではあるが「惰民という論には一抹の真実」があり、療養所で生きる価値を認めると同時に、人間として生まれた上は社会復帰に挑戦すべきとも述べている。前掲、「陳情書」475頁。

(93) 沢田二郎「〈点字〉「高原」の発刊をみて」（『高原』第8巻第6号、1953年8月）。のちに栗生楽泉園盲人会編『湯けむりの園 栗生盲人会五十年史』（栗生楽泉園盲人会、1986年）に「点字「高原」の発刊をみて」として再録。二郎が不自由者への支援を惜しまなかったのは、自身も重度障害者であっただけでなく、当時すでに弱視であった五郎が盲人会で点字を広め、点字図書館に働きかける様子を身近に見ていたからだろう（前掲「座談会 四十年の回顧」14頁）。

(94) 前掲、沢田二郎『第二部』210-211頁、221-222頁。

(95) 療養所に入所したまま、所外で日雇いの工事作業員や運転手などの労働につくこと。栗生楽泉園では近隣の工事作業員や運転手として働くために外出する人が多く、1961年には「社会復帰のための外出規定」が設置されたが、実際に社会復帰につながる事例は2割程度で、軽労働者に限られていた。1970年前後からの不況により土木工事等の作業員の需要が減り、労務外出は徐々に下火になっていった（全国ハンセン氏病患者協議会編『全患協運動史 ハンセン氏病患者の闘いの記録』一光社、1977年、162-163頁）。

(96) 前掲、沢田二郎「あいびき」49頁。

(97) 前掲、沢田二郎「あいびき」51頁。

(患者自治会) 会長に初当選した。初の不自由舎居住者の会長選出に対し、「一般会員による信任投票の結果は、五三%の支持率で、かつてなく低いものとなった」⁽⁹⁸⁾ という。自治会史の編纂委員は、「この支持率の低さは、軽症者側の無関心ぶりと同時に、不自由者の沢田に総代はつとまらない、という内部の偏見が票に表れたもの」としている。つまり、二郎を支持したのは不自由者であった⁽⁹⁹⁾。

逆風の中着任した二郎は要求の重点項目化を進め、道路舗装や不自由者棟更新に向けた予算獲得、トラックやバスの導入を実現し、不自由舎看護切替や年金問題に取り組んだ。また総和会を栗生楽泉園患者自治会と改称してイメージの一新をはかり、「支部長会議、厚生省交渉等にも積極的に参加し、全会員が舌を巻くほど旺盛な活動を展開した」。当時全患協ニュースの執筆と編集に携わっていた大竹章は後にこの様子を「革命でした」と表現している⁽¹⁰⁰⁾。

(5) 形成手術と社会復帰

再び運動の表舞台に立った二郎は、1961年から形成手術をくりかえし、鼻梁や眉毛をつくり、義眼を挿入した。変形の著しい顔貌で療養所の外の人に会うことを避けるためであった。

例えば始まったばかりのバスレクについても、「ほとんど人に会わない場所だから、私も行く気になったのであって、もしも大勢の人に会うような場所だったとしたら、私は行かなかっただろうと思うのです。」⁽¹⁰¹⁾と吐露している。「社会復帰はまったく考えないにしても、バスレクとか、そうした民主化運動に参加して社会へ出て行くとか、その程度のことは私もしたい、その程度にはなり

たいと考え」、形成外科手術に踏み切った。

手術によって二郎は、「整形前には夢のまた夢だったことを平然とやってのけられた」「どんなに変な形であっても顔にあるべきものがあるようになったということが一つの自信にな」ったとしている⁽¹⁰²⁾。それでも1967年6月、のちに結婚する文通相手の女性に京都で会った際には「とても、私の妻になるような女性ではない」⁽¹⁰³⁾と感じ、それがきっかけの一つになったのか、1968年には自治会長職を固辞して多磨全生園へ転園し、二度目の、長期間にわたる形成手術に挑んだ。二郎はのちに、結婚の話が出て3年後には社会復帰の準備を始めたとしているから、この二度目の手術は明確に結婚と社会復帰を意識したものだろう⁽¹⁰⁴⁾。印刷所開業に向けた施設との交渉、協力者との調整、開業の資金準備には時間を要しただろうから、1970年11月の元保育所への転居から逆算して、1968年に準備を始めたというのも自然である。

当時の療養所では、後遺症、特に顔の変形の有無は外出や社会復帰の可否を決めるとみなされていたから、変形の著しい二郎の挑戦は、賞賛はされなかったかもしれない。しかし、かつて患者運動をめぐる周囲と対立し、また不自由者初の自治会長として療養所内の複合差別を経験した二郎にとって、優先すべきは療友の認識ではなく、「どれほど長く閉じ込められても、どんな容姿になっても、人間は人間なんだから社会的に通用する人間だということを立証するということ」にあった⁽¹⁰⁵⁾。

ここまで見たように、二郎は患者運動における二度の挫折を経験して自らを恃む生き方を身につけ、書くことで療養所内のホスピタリズムと対峙し続けた。失明者が生きる姿にその打開の糸口を

(98) 前掲、栗生楽泉園患者自治会編『風雪の紋』355-356頁。

(99) 17年事件の際も、不自由舎入居者が処遇改善を求めて青年たちの蜂起を支持している。前掲、沢田二郎『第一部』93頁。

(100) 大竹章「趙根在の写真を語る」(ハンセン病市民学会編『ハンセン病市民学会年報2015 バトンをつなごう 当事者運動と市民のかかわり』ハンセン病市民学会、2016年)158頁。

(101) 前掲、沢田二郎『第二部』237-238頁。

(102) 前掲、沢田二郎『第三部』58頁。二郎は1964年10月、第二回療養生活研究会出席のため上京した折、都内公共交通機関で乗客と体を密着させる状況を経験している。発症後、在宅の時代は近隣住民からの差別を受け、入後も療養所の職員以外と接する機会の少なかった二郎には、驚愕の事態であったろう。

(103) 前掲、沢田二郎『第三部』90頁。

(104) 前掲、「陳情書」495頁。

(105) 前掲、「本人調書」501頁。

見つけた後は、不自由者として初の自治会長となり、また将来の妻と出会って療養所から踏み出す経験を積み重ねた。趙と出会い、撮影されたのは、その最後の時期にあたる。

1968年8月、二郎は最後の形成手術を終えて栗生楽泉園へ戻った。その年の暮に趙の自宅を訪ね、2年前に撮影された肖像写真を見るのである。

3. 「写す人と写される人の合作」の意義

(1) 1966年の肖像写真をめぐって

1966年に趙が撮影し、1968年に二郎に見せた肖像写真が【図9】である。撮影時期は、背景に写り込むカレンダーと趙の栗生楽泉園滞在の時期から、1966年12月と特定できる。

この写真は、これまでに少なくとも6回公開されている⁽¹⁰⁶⁾。初公開は、1981年6月に発行された



図9

『季刊人間雑誌』第7号のグラビア「日本国らい収容所」であった⁽¹⁰⁷⁾。

それに先立つこと10年、趙は、長島愛生園で入所者の詩人たちとの座談会に招かれ、この写真を二郎に見せた時のエピソードを披露している⁽¹⁰⁸⁾。

「これは手前味噌ですが、栗生の沢田二郎さんね、彼女ができたんですよ、“壮健”さんでね。〔中略〕沢田さんがいつか十二月の厚生省交渉のあとだったか、ぼくの家へ行きたいというので来てもらったんだけど、そしたら電車の中でこういうんです。私があなただけのところへ行きたいのは、あなたが私の写真を撮っている、その写真を見たい。私は一人の女と結婚〔婚〕しようとしているが、おれは自分でどういう男かわかんというんです。それであなたの撮った写真を見たい、それで自分の鏡を探してみたい。」⁽¹⁰⁹⁾。

管見の限り、二郎自身はこの出来事に言及していない。しかし二郎は他の「壮健」の知人や職員にこの結婚について意見を乞うており⁽¹¹⁰⁾、「壮健」の女性との結婚を前に、療養所の外で暮らす人の目から自分の選択がどう見えるか知りたく望んでいたことは十分考えうる。

趙は写真を見せた時のことを次のように語った。「それをきいて、ぼくは怖かったですよ。そりゃ彼を正面すえて撮った写真は仰山ある。いわゆるクロクやいた写真もあるわけですよ。片方の眼は眼帯して、片方だけギョロッとさせて、あごを出したね。沢田二郎これ、この写真をどう読むかってね。」「そしたら沢田さんジイーッと見て、わかったというんです。わかったというのは、なんか自

(106) ①前掲『季刊人間雑誌』（第7号、タイトル「井村健二氏」、1968年）。②高松宮記念ハンセン病資料館 開館5周年記念展「趙根在（遺作）写真展 ハンセン病の光と影」タイトル「独眼」（1998年10月15日～11月30日、撮影年の記載については不明）、③趙根在撮影、内川千裕編集、趙根在写真集制作委員会「写真集 ハンセン病を撮り続けて」（草風館、2002年、タイトル・撮影年記載なし）、④国立ハンセン病資料館2014-2015年度企画展「この人たちに光を 一写真家 趙根在が伝えた入所者の姿」（展示・展示図録、タイトル「独眼」、1967年）、⑤大竹章「趙根在の写真を語る」（2015年度ハンセン病市民学会における報告、のち前掲『バトンをつなごう 当事者運動と市民のかかわり』所収、タイトル「独眼」、1967年）、⑥原爆の図丸木美術館企画展「趙根在写真展 地底の闇、地上の光 一炭鉱、朝鮮人、ハンセン病一」（展示・展示カタログ、タイトル「沢田二郎」、1967年）。ちなみに1981年に発行された須雄二・趙根在『詩と写真 ライは長い旅だから』（皓星社）には、金夏日と小泉孝之の肖像写真は掲載されているが、沢田二郎の写真はない。同年6月に発行された『季刊人間雑誌』第7号の表紙裏には菊池恵楓園入所者の鷹志順が、裏表紙裏には沢田二郎が掲載されているから、重複を避けたのかもしれない。

(107) キャプションには「井村健治氏 一昭和12年、13歳で群馬・栗生楽泉園入所。昭和45年社会復帰のため一時退所。現在印刷所経営。（昭和43年撮影・趙根在）」と記載された。この時二郎は、園名であった「沢田二郎」を戸籍上の本名とし、「沢田印刷所」を経営していたが、肖像写真のキャプションでは偽名であり、撮影年とした理由も不明である。なお先述のように、1968年は二郎が社会復帰の準備を始めた時期にあたる。被写体が「沢田二郎」であると公表されたのは、管見の限り2015年度ハンセン病市民学会における大竹章の報告が最初である。

(108) 村井金一・沖三郎・樹島稚治・近藤宏一・さかいとしろう・しまだひとし「収談 私のらい参加 炭坑・朝鮮人・ハンセン氏病」（『季刊らい』第18号、1971年3月）。村井金一は趙根在の日本での通名。

(109) 前掲、村井金一ほか「私のらい参加」14頁。

(110) 前掲、沢田二郎『第三部』84-85頁。

分の写真を見て、自分の存在するひとつのすごさみたいなものをね、感じたみたいやね。おれてのはこんなにすごいかって。それはいわゆるみじめとか、あわれとかでなくておれてのはこんなにすごく生きているかというふうに感じたみたいやね。〔中略〕そのとき沢田さんはね、鏡にうつる自分じゃなくて、フィルムにうつる自分を見て、おれはこんなにすごいかと、すごい人間が生きていかなくはないかとね。」⁽¹¹¹⁾。

このエピソードにかかわって趙が引き合いに出したのが、二郎の1952年の創作「生き残り」であった。「彼は『生きのこり』という小説を書いていますわね。生き残りの果てとしての自分の写真を見て、そして京都の女と結婚しようとはらを決めよった感じがあったね。いまタイプ習ったり、四苦八苦してますわ。」「沢田さんはあの写真、自分の姿としていいと思っているわけね、すごいと思っているわけ。ぼくは彼奴病んどらんと思ったね。」⁽¹¹²⁾。趙は撮影によって、「社会のいゝ価値基準というもの、あるいは美醜という問題をね、ひっくり返せるか」⁽¹¹³⁾を試みていた。二郎は、趙がとらえた自身の姿を受容することで、「価値基準」の転換を体現する存在になったともいえる。

1969年秋、結婚を前に妻となる女性が栗生楽泉園を訪れ、二人の関係は園内で公になった⁽¹¹⁴⁾。同園の多くの入所者にとって、二郎の結婚と社会復帰は晴天の霹靂であり、弟の五郎も驚愕したという⁽¹¹⁵⁾。社会復帰者や労務外出の増加により患者作業が危機に瀕し、また不自由舎の劣悪な状況の改善が叫ばれていた当時の療養所において、自治会長が「壮健」の女性と結婚し、しかもその人を療養所に招き、ほんの短期間であっても滞在させていたことは、良い感情をもって迎えられなかっただろう。二郎は栗生楽泉園内の共産党細胞委員会、そして園内の「藤原学校」で共に学んだ入所者を集めて妻を紹介したが、「おめでとう」とも、「よ

かったね」とも何とも言いようがなかったのでしよう。結婚についても結婚後の生活についても、誰一人、一言も触れませんでした。」⁽¹¹⁶⁾と書いている。

一方、趙は少なくとも先述の座談会では否定的ではなかった。むしろ自分が撮った写真が二郎の選択を後押ししたことを、誇らしく受け止めているようでもある。そして趙が結婚を否定しなかったことは、二郎にとって自己を肯定される経験であり、社会復帰の年齢としては決して若くない40歳の二郎に、「壮健」の女性と結婚し社会で生きていく選択をさせたのだろう。

趙は長島愛生園での座談会で、「真正面から撮る」ことについても語っている。「じっさいぼくがカメラを持ってまず撮ったのも真正面からなんです。で真正面から撮ってぼくは写真で何かを語る。そして写される人間は自分を見せることによって自分を主張するいうときに、ぼくは初めて写す人間と写される人間との合作ができるんじゃないか。」⁽¹¹⁷⁾。こうした話は、二郎も聴いていたのかもしれない。趙のレンズの前に、被写体となった二郎も「自分を見せる」経験をした。二郎がその写真を見たいと願ったのは、撮影の時「自分を見せ」ていることを自覚していたからではないか。こうして二郎が内なるホスピタリズムを克服しようとする姿を、趙は「彼奴病んどらん」と表現したのである。

炭鉱の底で身体を武器に生き延び、人間としての被写体に迫ろうとする趙が、やはり「人類の最低でうごめく」経験をした二郎を、正面から、障害を含めて「すごく生きている」人としてとらえ、「すごい人間が生きていかなくはないか」という足場に礎のようにつなぎとめた。趙も、この一枚が被写体である二郎によってそのように受け止められたことに手ごたえを感じ、座談会で「これは手前みそ」と形容して、そのエピソードを披露

(111) 前掲、村井金一ほか「私のらい参加」14頁。

(112) 同前。

(113) 前掲、村井金一ほか「私のらい参加」15頁。

(114) 前掲、沢田二郎『第三部』181-182頁。

(115) 前掲、沢田五郎『その土の上で』3-6頁。

(116) 前掲、沢田二郎『第三部』188頁。

(117) 前掲、村井金一ほか「私のらい参加」9頁。

したと思われる。

趙根在の写真が初めて一般に公開されたのは1972年、長島愛生園に入所していた森田竹次による評論集『偏見への挑戦』⁽¹¹⁸⁾の表紙写真と、栗生盲人会機関誌『高嶺』の創立40周年記念特集号『高嶺の人びと』⁽¹¹⁹⁾の表紙写真、及びグラビアにおいてであった。趙の写真はこの時期「被写体となった人たちのあいだで特別な意味を持ちはじめた」⁽¹²⁰⁾が、その4年前、1968年に被写体である二郎が自身の肖像写真を評価していたことは、趙自身にとってもいわば成功経験としての意味があっただろう。つまり二郎と趙は、この写真を通して、互いにその背中を押したのである。

(2) 社会復帰後の交流

二郎が社会復帰した後も、二人の交流は続いた。1970年、二郎は園名であった沢田二郎を戸籍名とし⁽¹²¹⁾、11月1日、栗生楽泉園内の社会復帰準備施設であった元保育所の建物へ転居した。翌年2月には「沢田タイプ印刷所」(のち「沢田印刷所」)を立ち上げ、妻と、タイプや搬送・運転を担った栗生楽泉園入所者の岸従一・岸千恵子夫妻⁽¹²²⁾、療養所職員や地域の同業者などの協力を得て、徐々に経営を軌道に乗せていった。

二郎の社会復帰を支えた療友の人脈は、趙が栗生楽泉園で撮影を重ねた対象とも重なる。例えば、五郎の歌集を笈が整理し、表紙に趙の写真を配し、二郎の工場で印刷・製本したこともあった⁽¹²³⁾。

二郎は社会復帰にあたり、「仕事を成功させる

こと、家を建てること、妻の子どもや身内と親族としての関係を結ぶこと」⁽¹²⁴⁾を自身に課していた。それらはすべて、結婚を破綻させずに暮らす条件だった。大竹章によれば、二郎と家族は、「どこにでもいるような」「極めて普通の家族の生活」を送ったという⁽¹²⁵⁾。

1983年、草津町内に念願の新居を建て、10月には協力者を招き、祝賀会を催した⁽¹²⁶⁾。趙も招待され、宴会や家族の写真を撮っている⁽¹²⁷⁾。1966年に栗生楽泉園で撮影された二郎の写真は、うつむき加減のものが多く、笑顔は外科治療場の看護師にしか見せていない。しかし祝賀会の写真では、義眼こそガーゼに覆われているものの、協力者や姉、弟らと談笑する姿、歯が見えるほどの笑顔が何枚も残されている。1968年に移植した黒々とした眉、高さを保った鼻梁も、自治会長時代の写真と大きく異なる。

二郎が最晩年に発行した自伝は、この祝賀会で終わっている。その1年半後の1985年4月、印刷所の経営や二郎のケア、子どもとの関係維持に奔走し続けた妻がくも膜下出血で倒れた。二郎は、形式上栗生楽泉園の入所者となっていることを理由に、妻の入院先の病院から付添を拒否された⁽¹²⁸⁾。

この後、妻の病と自身の障害の悪化によって社会復帰を断念した二郎の姿を、弟の五郎は次のように詠んでいる⁽¹²⁹⁾。

木の根あらわな道辿り行けば聞こえる

印刷の音よ兄が夢賭けし処

(118) 森田竹次『偏見への挑戦』(長島評論部会、1972年)。

(119) 高嶺編集部編『高嶺の人びと』(栗生盲人会、1972年)。この点について、岡村幸宣「地底の闇、地上の光—趙根在の残した写真と言葉」(前掲、原爆の凶丸木美術館『趙根在 地底の闇、地上の光』)、及び前掲、岡村幸宣編『趙根在年譜』を参照。

(120) 前掲、岡村幸宣「地底の闇、地上の光—趙根在の残した写真と言葉」135頁。

(121) 弟の五郎は1970年、「父が付けし名を変え隠れ病みいたる兄はその名を戸籍名にする」と詠んでいる(前掲、沢田五郎『朴の風ぐるま』41頁)。

(122) 国賠訴訟の陳述書で、二郎は「この夫妻と一緒にやると言ってくれたので決めたのです」と書いている(前掲、「陳情書」475頁)。

(123) 「この歌集は題字を赤木〔健介〕先生、表紙に趙 根在氏の写真をいただきました。原稿整理については笈君〔笈雄二〕におねがいし、清書は眼科医竹下芳先生を煩わせました。／この歌集の印刷は、私の兄が印刷屋をやっている関係上そこでやることにしました。」とある(前掲、沢田五郎『朴の風ぐるま』140頁)。

(124) 前掲、「陳情書」476頁。

(125) 前掲、大竹章「趙根在の写真語る」258頁。

(126) 井藤信祐「沢田二郎さんを紹介する」(『JLM』第612号、1984年10月)。

(127) この時撮影された写真のコピーが残されている。A4判のクリアファイルの表紙には「沢田二郎氏邸宅完成祝い 御兄弟衆御参加あり」と手書きした紙片が貼られ、1枚ずつ時系列に収納された写真には、宴席の様子や、集まったきょうだいの出立の見送りと思しき場面などが写されている。当館図書室所蔵。

(128) 二郎は付添拒否への怒りを、創作に書き込んでいる。沢田二郎「胸奥の棘—この一篇を藤原時雄先生と鈴木義雄君の霊に捧げる—⑥」(『高原』第44巻第6号、1988年6月)。

(129) 沢田五郎『その木は這わず』(皓星社、1989年)。引用は一首目162頁、二・三首目163頁。

苦しめて勤めしは人柄に付加すべし
財も事業も過ぎれば空し
厚き壁乗り越えし人と言われつつ
元に戻りゆくも衆目の中

三首目は、衆人環視の中、二郎が再度療養所へ戻る姿を、やりきれなさをもって表現している。そしていずれの歌にも、間近で二郎とその妻の奮闘を見守って来た五郎の労りが垣間見える。

二郎自身は、多くの社会復帰経験者がそうであったように、晩年までその経験を生きる糧にし続けた⁽¹³⁰⁾。ハンセン病違憲国家賠償請求訴訟東日本訴訟では、駿河療養所で唯一の第一次原告として、療養所の過酷な処遇と共に社会復帰についても証言し、その後ガンと闘いながら綴った自伝の第三巻では、結婚と社会復帰が主題となっている。療養所に戻ってからも、二郎は周囲の入所者との認識の違いを隠そうとしなかった⁽¹³¹⁾。

その足跡と言動は、晩年まで調和よりも自己主張を優先しているように見える。しかしそれは、療養所内での差別と矛盾を冷静にとらえ、自分という最も小さな拠点から違和感を発言し続けた姿であった。そのことによって、患者それぞれの意志を顧みず、療養所でのみ生きることを強いた国策の誤りを指摘し続けたともいえる。

二郎は後年、大方の入所者とは異なる見解であると前置きして、「醜さ」への反応と差別とは分けるべきと述べている。「[電車の中で] 例え私の傍らに人が座らなくても、それを差別されたと考えてはいけない。自分の醜さを正確に自覚したくないものだから、正確に認識しないのです。そこに患者の側にも差別、偏見に対する本質に迫れないものが出てくるわけです。」⁽¹³²⁾。さらに、人びとは「醜さ」を理由に差別するのではなく、ハンセン病隔離政策によって植え付けられた「遺伝する伝染病」という奇怪なイメージによって差別すると主張した。こうした二郎の発言は、強制隔離政

策への批判であると共に、先に見た趙の「美醜という問題を」「ひっくり返せるか」という問いとも響きあっている。

おわりに — 「その人」の文脈を可視化する

沢田二郎は、重篤な後遺症と、社会復帰及び療養所外の女性との結婚という、入所者にとって両極端ともいえる経験をした。それは、重い障害を負った回復者の多くが療養所内で生活せざるを得なかった状況とは異なり、またほとんどの社会復帰者のように、病歴を隠し続ける生活でもなかった。療養所の門戸を閉ざしてきた行政も、重度の後遺症がある二郎が長期にわたって実質的な社会復帰を続けることは想定していなかった⁽¹³³⁾。

未踏ともいえる選択をするべきかどうか、二郎は趙の写真を見て判断したいと願った。無論、それは趙という撮影者による表現であり、趙も本人に見せることを想定しておらず戸惑ったものの、写真を見た二郎は自分が生きていることの実感を得て、療養所から踏み出していった。趙にとっても、被写体本人から肖像写真を受け入れられ、また被写体の選択を力づけたことは、自信につながった。

また趙は二郎の社会復帰後も交流を継続し、写真に残した。つまり彼は「ハンセン病を撮り続けた」だけでなく「その人を撮り続けた」カメラマンでもあった。

二郎の名や足跡を知らずに、趙が二郎を撮影した写真を見ることも可能であろう。その時、これらの写真はハンセン病療養所で撮影された、もしくはハンセン病問題に関する記録ととらえられるかもしれない。しかしこれらの写真には、写される人の物語があり、それは必ずしもハンセン病問題における「大きな物語」を伝えることを意味しない。従って「ハンセン病問題」ではなく、あくまでハンセン病を病んだ「その人」を趙が表現し

(130) 前掲、西浦直子「らい療養所からの青年たちの「社会復帰」をめぐる」。

(131) 二郎は「このような体験（社会復帰）を持つ私は、ハンセン病に対する差別や偏見についての考え方が療友と少し異なっています」とコメントしている（前掲、沢田二郎「人間能力への挑戦」、81-82頁）。

(132) 前掲、沢田二郎「人間能力への挑戦」82頁。

(133) 1956年5月23日厚生省療養所課発の「退所決定暫定準則」によれば、療養所として社会復帰を認める際の「希望事項」として「1. 顔面及び四肢に著しい畸形症状を遺さないこと。（後遺症の問題）。」とある（高島重孝「癩の治癒性に就いて」『長島紀要』第6巻第11号、1963年3月、2頁、前掲、国立ハンセン病資料館2012年度春季企画展図録『青年たちの社会復帰』6頁）。

たものである。さらに、不可能とされた選択を重ねて生きた二郎の姿を表すことで、見る者に、「大きな物語」からはみ出す存在を不可視化してきたのではないかと問いかけるものでもある。

趙とその被写体をよく知る人は、当然のこと、これらの写真から沢田二郎本人を想起しただろう。しかしその人びとがいなくなり、新たに写真を見る者が「大きな物語」だけをくみ取ろうとすれば、ハンセン病問題が「その人」の顔と名前を奪ってきた歪みをくり返す可能性もある。「大きな物語」への回収という暴力に、将来にわたって抵抗するためには、「その人」に迫るための情報の蓄積と、そこからふたたびハンセン病問題を俯瞰し直す視野を獲得する努力が必要である。

このことは、写真を「よむ」目を慎重に研ぎ澄ますことにも通底する。美術批評家の土屋誠一は、趙根在と上野英信の共同監修による前掲『写真万葉録・筑豊』に解説がほとんど付されていないことについて、筑豊に暮らす人からの「なぜ さつえいねんがっぴと さつえいばしよを いれなかったのですか」「このしゃんしゅうをみせてはい これでちくほうをりかいしろというても そら ちょいとむりよ」⁽¹³⁴⁾という感想に、次のように応答する。「説明が最小限に抑えられたこれらの写真は、何か理解の容易な—あるいは消費しやすい—「意味」を伝えてはくれない。」「この写真集は、見る者に対して半ば匕首を突きつけるかのように、「記録」一葉一葉を丁寧に読み解かせるための「抵抗」としてあるのだ。だからこの写真集を今日においてみる「あんちゃん ねえ

ちゃん」は、一枚一枚の写真とその編集上最低限付された言葉を、慎重に読み解くほかない」⁽¹³⁵⁾と。

本稿は、土田とは異なる方法を試みているが、「何か理解の容易な—あるいは消費しやすい—「意味」を（キャプションとして）加えることには慎重さが求められる、という点は頷ける。その慎重さの上で、写す人と写される人が残した言葉や表現を重ねながら、それぞれの被写体の文脈を「よむ」こと、そこから今一度、写真を眼差すことが求められよう。それは、ハンセン病患者、回復者と呼ばれた「その人」の記憶を受け取り、将来へ伝える者が取り組む課題である。

なお二郎がそうだったように、栗生楽泉園で被写体となった笹雄二、高橋夢一、沢田五郎は「書く」人であった⁽¹³⁶⁾。このことは、趙根在の写真を「よむ」行為に、被写体が書いた表現を読み解くというもうひとつの「よむ」行為を重ねることを可能にする。単独で文字による表現を残してなくとも、園内誌や盲人会誌には座談会や行事の記録など多彩な情報がある。被写体が「ハンセン病患者」や「入所者」の一部でなく「その人」として生きた姿を掘り起こす手立ては、豊かに存在する⁽¹³⁷⁾。

回復者が自ら語れなくなる時代を前に、回復者及びその家族の証言の収集が急がれている。生活資料や画像資料から、固有の「その人」の記憶をたどることも必要になるだろう。証言や関連資料との往復を重ね、「その人」の文脈をひもとくことが、匿名の差別への抵抗にもつながるのではないだろうか⁽¹³⁸⁾。

(134) いしざきしずか「読者の手紙から」(上野英信・趙根在監修『写真万葉録・筑豊 月報』2、葦書房、1984年11月) 8頁。

(135) 土屋誠一「企図された「不親切」としての記録集—『写真万葉録・筑豊』(目黒区芸術文化振興財団・目黒区美術館編『「ヤマ」の美術・写真・グラフィック・映画「文化」資源としての「炭鉱」展』目黒区芸術文化振興財団・目黒区美術館、2009年) 288頁。なお本稿脱稿後、原爆の図丸木美術館での企画展について、土屋によるレビューが公開された(土屋誠一「カメラを持った思索者「地底の間、地上の光 炭鉱、朝鮮人、ハンセン病 趙根在写真展」について」『レビューとレポート』第51号、2023年11月3日公開、<https://note.com/misonikomioden/n/na9d0d949bc95> 最終閲覧2023年12月1日)。土屋は趙根在の写真が、土門拳らのリアリズム写真とは異なり、同時代の写真の潮流の影響を受けて表現として自覚的に撮影されていること、一方でそれらを発表することよりも「趙にとって、写真という媒体で表現を行い、自らのその行為を思索すること自体が重要」であった可能性があるとしている。ここではそれらの論点を踏まえることができないが、土屋が趙根在と映像制作の関係について「学校教育で享受できなかった「教育」を、映画の現場において「学び直す」ことを選択した」としている点は、ハンセン病療養所に通い入所者と盛んに議論をしていたという姿とも重なり(前掲、大竹章「趙根在さんのこと」9頁)、趙根在にとってハンセン病療養所での撮影がいかなる意味を持ったかを検討する際、念頭におくべき指摘である。

(136) 被写体の判別については、齋藤君子氏のご教示に依った。なお執筆活動する人を撮影した背景には、至近距離で撮影できた対象が限定されていたこともあろう。

(137) 趙自身も聞き書き(文字)によって「その人」を表現している。聞き手・趙根在「八十三年の夢 聞書・文守奉小伝」(前掲『季刊人間雑誌』第8号、107頁)、聞き手・趙根在「聞書・川は涙となって(語り手・金末子)」(前掲『季刊人間雑誌』第9号、165頁)。

(138) 「5 宿泊拒否事件の際の差別文書が明らかにしたもの」(ハンセン病に係る偏見差別の解消のための施策検討会『ハンセン病に係る偏見差別の解消のための施策検討会 報告書』(2023年) 24頁、西浦直子「ハンセン病問題と具体的に向き合うために」(『部落解放』第835号、2023年3月)。